ると吉統もこれに従い、慶長十年（一六　五）七月、吉統は四八才で配所（江戸牛込の説あり）において病没した。

慶長十一年、徳川家康は、豊前中津城主黒田長政を筑前福岡五〇万石に、細川忠興を豊前小倉三九万石に転封した。忠興の三男忠利は豊前中津城主となった。寛永九年（一六三二）、細川忠利は、のち加藤家改易後の肥後国に転封され、子孫は黒田氏とともに明治に至るのである。

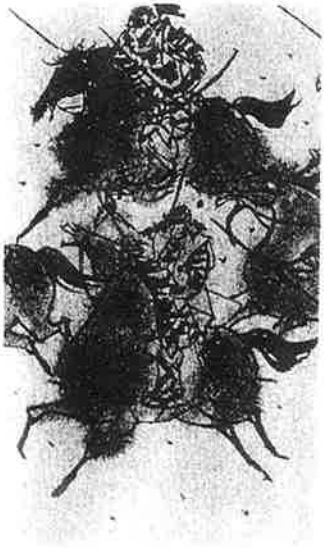
慶長九年三月、黒田如水孝高が死去する。享年五三歳
慶長十年七月、大友吉統が死去する。享年四八歳
慶長一七年七月、大友義乗が死去する。享年三六歳
元和　年四月、徳川家康が死去する。享年七五歳

引用参考文献

大分県の歴史　昭和六二年　山川出版社

郷土戦史の研究　帝国在郷軍人会大分支部編
平成九年　別府史談会編集抄訳

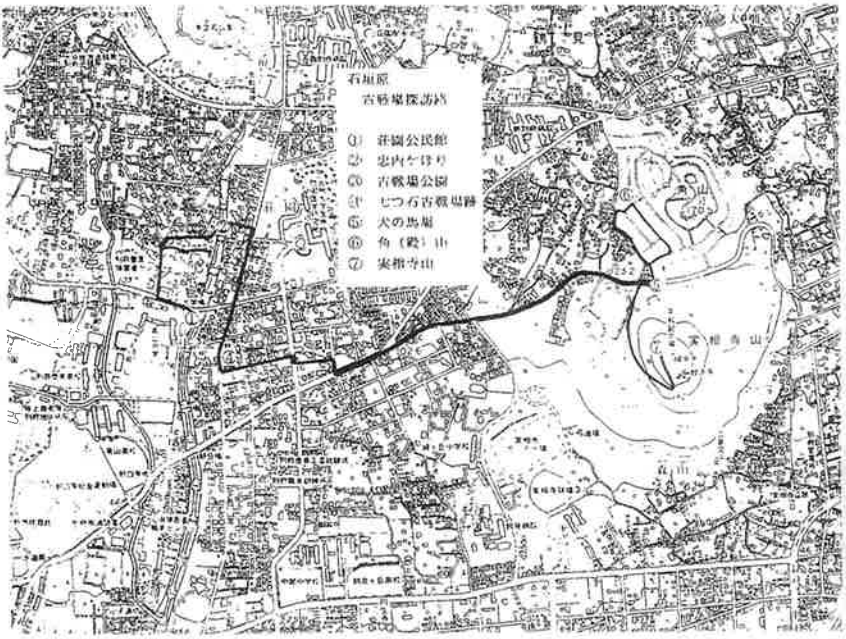
別府史談　第五号、第十号



石垣原の古戦場をたずねて

8月24日（日曜日）

別府史談会



石垣原と両軍配置

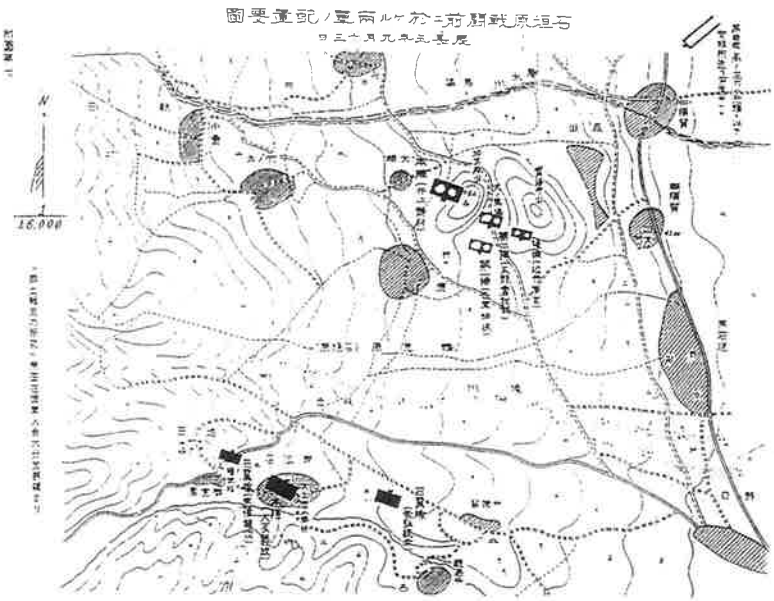
東は石垣村、南は別府、朝見の両邑、西は立石村より大平山麓、北は鶴見の原中村人家に接したり。其域や東西三十町に遠く南北二十町に近し、戦地は今海道より西に沿ふて大平山の裾野に松柏生たる野山の際南に傍て「五反畑」と号せし所に大石の五六個ある所也。里人この石を屋形石と称ふ。

（石垣原戦略考）

大友軍はその主力を立石に置き、吉弘嘉兵衛統幸は右翼隊となり坂本に、宗像掃部鎮次は左翼隊となり御堂ケ原に布陣した。

義統の本陣のあった所の西で独立樹のある所に、大友義統がこの戦闘に使った陣鐘を掛けたという大きな松がある。鐘掛松という。御堂ケ原はこの松の西方約一町の所らしい。

黒田軍の第一梯団は井上九郎右衛門を総指揮官とし、実相寺山付近に進出してその態勢を整え、先ず母里與三



兵衛、時枝平太夫の指揮する第一陣を以て石垣原に進出せしめて、第二陣はその後方に前進した。主力は角殿山（実相寺山西方）に集結して、爾後の攻撃を準備し、松井康之、有吉立行の指揮する二百騎は、実相寺山の南部の突角に位置して予備隊となった。

戦闘の状況　（郷土戦史の研究）

第一会戦

大友義統は、吉弘統幸を第一陣とし九百余騎を以て石垣原に進出して、敵の第一陣を迎撃せしめ、宗像鎮次に五百余騎を与えて第二陣とし、続いて石垣原に前進を命じ、自ら主力を擁して立石にあった。

吉弘統幸は十三日早朝、石垣原に進出して鶴翼の陣を張り、其の一部を挺進させて軽戦の後敵の先陣を誘致させる。

黒田軍の第一陣は勝ちに乗じて追撃したが、境川の線で統幸俄然攻撃に転じ、正面と両側とから包囲したので、黒田軍は大いに奮闘したけれども、遂に大なる損害を受けて実相寺山に向かい退却した。

統幸はこれを窮追して犬の馬場まで追い込んだ。この戦闘に於て黒田軍の戦死八十、大友軍の戦死十。

第二会戦

黒田軍第二陣の将久野治左衛門は、時に年十九歳であった。友軍の第一陣の敗退するのを見て大いに憤慨し、第一陣に続いて追撃中の吉弘統幸の軍を逆襲せんとす。

これを見て大友の第二陣宗像鎮次は部下五百余騎を以てこの戦闘に加入し、ここに両軍の大混戦が始まった。

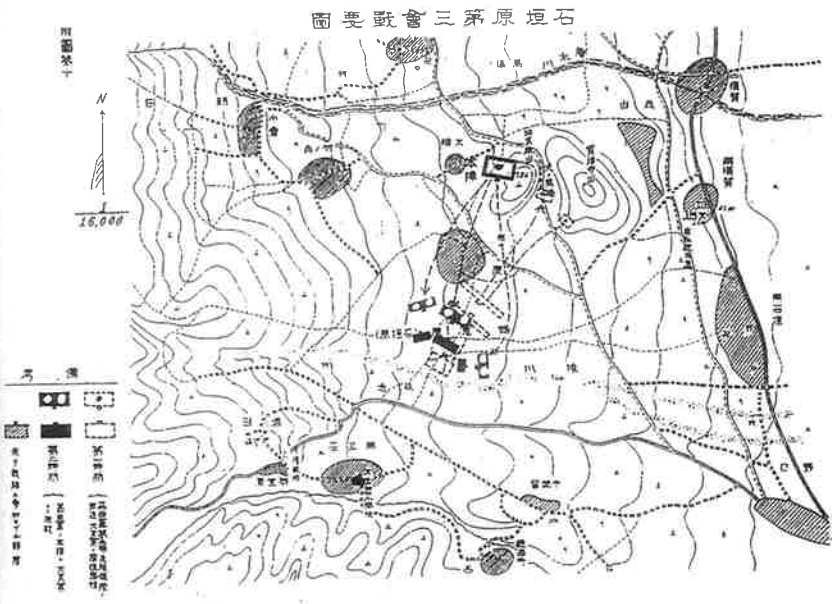
久野治左衛門は身を挺して敵陣に突入せんとするので、家臣曽我部五右衛門はこれを制して「今や敵が勝ちに乗じて居る時であるから、暫らく守勢に立ち敵の疲れるのを待って攻勢に転ずべし」と言った。けれども久野はこれを聴かずして跳り出たので、曽我部も続いて大友の兵の中に突入した。

久野治左衛門は敵十七人を斃した。十八人目に宗像鎮次を斃したが、鎮次の部下の為に討たれ、その部下の大部戦死した。曽我部五右衛門も奮戦の後、都甲兵部と差し違えて戦死した。かくして、両将の戦死は黒田軍の第二陣を大混乱に陥し入れた。

第三会戦

大友義統は立石からこの状況を見て、統幸に現在地を撤退すべきことを命じたが、統幸は最初から戦死を覚悟していたので、その命に従わなかった。そこで、義統は吉弘を討たすなとて救援の為にその麾下から四、五百人を増派した。

これより先、黒田軍の主将井上九郎右衛門は、野村市右衛門・後藤左門と共にその主力を角殿山の北側に置き、自ら山上に於て大勢を見ていた。第一、第二陣共に破ら



れ松井、有吉の部隊も破られるのを見ていながら、なお冷静に戦機の熟するのを待っていた。

今や大友軍は石垣原の芝生に座って扇を使って息をついているのを見て、機到れりとなし、部下に下馬を命じ攻撃前進に移った。

井上九郎右衛門は全兵力を三分し自ら正面の軍を指揮し、野村市右衛門は西方より、後藤太郎助は背後に迂回して、大友軍を包囲する如く前進すれば、大友軍もまた三分してこれに当たる。戦闘は先ず中央の井上の陣から始まったが、大友軍の最前線は撃破せられて後退する。

井上これを見て唯今敗退するは、この頃に集まりし烏合の葉武者なり。屈強の武士は後方に控え、何れも今日の討死を覚悟していることを察し、部下を制して深入りを禁じた。

統幸これを見て物馴れたる敵の指揮振りかな、このう

えは我より進んで戦死せんと、二千人を以て攻撃に移り両軍入り乱れて、またもや混戦乱闘となった。

両軍死力を尽して奮闘し勝敗決せず。大友軍屡々崩れんとす。統幸はもとより生還を期していなかったので、朱柄の鎚を振って奮闘し、今朝来敵を斃すこと二十三人。進んで黒田軍の主力に突入し、主将井上九郎右衛門を求めて一騎打ちの勝負を望んだ。

井上は十文字の鎚を以てこれに対し、火花を散らして奮闘す。統幸の鎚が屡々九郎右衛門を突いたけれど、その鎧が堅くして通らず、その内遂に却って九郎右衛門のために突かれて戦死した。統幸の家臣これを見て一足も退かず皆戦死した。

吉弘統幸の戦死は実に此の互角の戦闘に最後の決を与えた。大友軍は遂に潰走に陥り残兵八十余騎立石方面に敗走に移れば、黒田軍はこれを追撃して大勝を得た。

この戦闘に黒田方三百八十人討死す。大友方百六十人討死す。黒田方始は小勢なりと雖も加勢加わって大勢と成る。大友方初は大勢なりといへ共近国の加勢はなし。或は討死し或は落失せ、残る八十人立石に引退く。

（豊西記）

1　学習会　説明者　矢島嗣久氏

2　忠内が堀

「豊国紀行（貝原益軒）」の付図には『忠内ケ堀カラホリヨコ三間　長サ百間余（長さ約百八十米、幅約六米）』とある。

境川は扇状地を流れる荒川で、日頃は流れが殆どなかったので、里人が忠内が堀と呼ぶ場所を、益軒はカラホリと思ったのであろう。後藤碩田の図によると、立石から下り境川を渡渉して石垣原に抜ける道が二本ある。川幅の狭い忠内ケ堀はこのいずれかであろう。

両軍が、遭遇して壮烈な戦闘が繰りかえされた場所が、七つ石周辺だとすれば、立石から下って来た大友方の兵員は、おそらく今の「であい橋」の上下流約二百米内の川床を渡渉したのであろう。

「豊国紀行付図」にある忠内ケ堀を通る道も、おそらくこの辺りを通っていたものと思われる。

3 石垣原古戦場址

矢野嶺雄氏が浄財を投じて、両軍戦死者の供養塔などを安置した広場である。同所には矢野氏の「石垣原懐古」の詩を刻んだ石碑が建立されている。

4 七つ石

この付近が古くから合戦の激戦地と云われる。

「石垣原第二・三会戦要図」も遭遇戦の位置をこの辺としている。

巨石については次のように書かれている。

吉弘暫く息をつき　我身体を見てあれば、痛手薄手を七箇所迄手を負ひて働自由ならざれば、今は是迄と思ひ極め小高き所に大石の有けるを、是我が自害の場所なりと、つと立上り上帯切てかしこに投捨、腹十文字に掻切てこそ失にける。天晴よき自害やと貴賤是を感じける。家人戸右衛門と云者介錯して死骸を肩に引懸本陣に引き帰。

（増補大友興廃記中速見郡真玉庄住士田北弥太郎説）

吉弘是を見て石上に立揚り、長刀を振り回わして井上を目掛て突てかかり、…　（豊州乱記）

5 犬の馬場　（いのうのばば　豊国紀行）

第一会戦で、吉弘統幸の誘導作戦に乗せられて、「黒田軍の第一陣は勝ちに乗じて追撃したが、境川

の線で統幸俄然攻撃に転じ正面と両側とから包囲したので、黒田軍は大いに奮闘したけれども遂に大なる損害を受けて実相寺山に向かい退却した。統幸はこれを窮追して犬の馬場まで追い込んだ。この戦闘に於て黒田軍の戦死八十、大友軍の戦死十」

「二番に如水方の大将森（母里）太兵衛、三百余騎実相寺山より打出鶴見原に押向。大友方の大将吉弘嘉兵衛宗元三百余騎にて渡間合、半時ばかりの戦に黒田方屈強の侍八十五騎討死す。大友方も十騎ばかり討死す。森（母里）が兵散々に打負実相寺山の麓犬の馬場と云所に逃入。」（増補大友興廃記中にある速見郡真玉村庄住田北弥太郎説）

また、「豊国紀行」では、

「この山（角山）は実相寺には続かず離れたる山なり実相寺山との間七八十間ばかりあり　其間を犬の馬場と云う　鉄輪村に行く道あり　又イナフがババと云う　大友方の兵も立石を出て鶴見原にて出あひ合戦す　黒田の一陣母里與兵衛・時枝平太夫なりしが大友の侍大将吉弘嘉兵衛が勢に押立てられ実相寺と加来殿山の間犬の馬場迄引退く」

6　角山　（角殿山・加来殿山）標高約百七十米

現在はルミエールの丘と云う。「史跡　石垣原黒田如水本陣跡」の石碑がある。

本陣井上九郎右衛門・野村市左衛門、麓に第一陣母里與三兵衛・時枝平太夫、第二陣久野次左衛門・曾我部五右衛門　（三千余）

7　実相寺山　標高百七十米

実相寺の山頂からは石垣原が一望できる。黒田如水は同日（十三日）夕方、安岐城を経て実相寺山に到着した。時すでに野戦はおわり大局は黒田方に傾いていた。

この山の南麓に、細川家の家臣杵築城代の松井佐渡守康之と有吉立行が予備として陣を置いた。